



“第二の故郷”日本でファンに喜ばれるプレーを魅せたい。

ブレンダン・ジョーンズ プロ

1975年3月3日生まれ。オーストラリア出身。日本ツアーに本格的に参戦したのは2001年。ドライバーディスタンス1位となった300ヤードを超える圧倒的な飛距離を武器に、2002年の「フィリップモリスチャンピオンシップ」初優勝から順調に勝ち星を重ねている。2007年は「つるやオープン」「三井住友VISA太平洋マスターズ」「日本シリーズ」で年間3勝を飾り、賞金ランキング3位に。今シーズンは開幕戦「東建ホームメイドカップ」で通算11勝目をあげている。

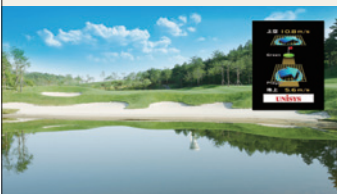


©JGTO

My Style

距離感を合わせるためにカップを見ながらストローク

開幕戦で勝利を飾ったブレンダン・ジョーンズ選手。決め手は、ここぞという時に決まったロングパットだという。「距離感を磨くためにボールを見ずにストロークする」練習をしているそうで、「カップを見て、素振り、ストロークすることで、長い距離でもタッチが合うようになります。プレー中はボールを見ますが、頭の中には直前まで見ていたカップの映像を頭に浮かべるようにしています」



テレビのプロゴルフ中継で表示される風向・風速データ

日本ユニシスは(社)日本ゴルフツアー機構、(社)日本女子プロゴルフ協会のスコアリングシステムを支援。当社のウインドステイクシステムで計測した風向・風速データをテレビ局に提供しています。

開幕戦優勝おめでとうございませぬ。最終日に9アンダーというビッグスコアを出した要因はどこにありますか。

最終日は、ライバルの一人だと思っている石川遼選手と同組になりました。彼は日本ツアーで人気ナンバー1のプレーヤー。一緒にプレーすると非常に多くのギャラリが観戦してくれます。多くのファンの見守っているなかでプレーできたことでモチベーションが上がって、良い結果が残せました。

技術的に好調だったのはどんな点ですか。

パットの調子が良かったですね。とくに10メートル前後のロングパットが何度か決まった

ことが大きいと思います。

1番ホールは石川選手とほぼ同じラインだったので、彼のパッティングを参考にすることができました。また、7番ホールは完璧だったセカンドショットが風の影響を受けて10メートル近くショートしてグリーンオンしました。風を読み間違えたのは自分のミスですが、完璧に打ったセカンドショットを無駄にしたくないという気持ちがあったので、バーディを取りたい思いが強かったんです。集中力も高くなっていましたから、気持ちでねじ込んだパットといえるかもしれませんね。

最終日は最終組の1つ前でプレーしていました。後続組

を待っている間は、どんなことを考えていましたか。

その時点で2位の選手と2打差。最終ホールはパー4なのでイーグルでなければ優勝決定という状況でしたから比較的リラクセスして待つことができました。セカンドショットがカッピンしないことがわかった時はホッとしましたね(笑)。

でも、次の瞬間、開幕戦で初めて勝ったという嬉しい気持ちがかみ上げてきました。

ジョーンズ選手は過去にアメリカツアーに参戦した経験があります。再びアメリカツアー挑戦も考えていますか。

私はギャラリーの皆様が温かい声援をくれる日本ツアーが

大好きです。それに、日本とオーストラリアは飛行機で9時間程度ですし、時差が1時間しかありません。家族を一番大事にしたい私にとって、アメリカよりも日本の方が戦いやすいんです。日本のツアーに参戦してから10年以上が経ちました。私にとって日本は“第二の故郷”ともいえる場所。今後のプロゴルフ人生も大好きな日本で送るつもりです。

最後に今シーズンの抱負をお願いします。

オーストラリアに家族を残している関係上、シーズン中でも試合を休んで帰国しなければいけません。すべての試合に出場することができないので賞金王を目指せませんが、毎年賞金ランキング3位以内をめざしています。また、日本で一番権威のある「日本オープン」は勝ちたいですね。どうぞ、応援してください。